# 特集 はこまち対談

Part 21

## 人と人とのつながりを、つくりたい。

### 大野 友莉（おおの ゆり）さん

㈱インフィニティスペース　代表取締役

〈PROFILE〉

㈱インフィニティスペース　代表取締役
２００８年フリースペース「むげん空間　小春日和」開業
展示会、ワークショップ、トークイベント等の自主企画を行う他、美術展・上映会・演劇公演・セミナーや講座等も開催。カフェも併設されている。
アートフェスハコトリ実行委員会､函館ハート･プロジェクト呼びかけ人､函館･むすびば副代表、日本イラク医療支援ネットワークのチョコ募金活動など

今後のテーマ：日本の課題を地域から解決する
スキル：人と人をつなぐこと。笑顔。
今やっていること：遊休不動産の活用モデルをつくること
趣味：音楽活動、芸術鑑賞

むげん空間 小春日和 にて

**むげん空間小春日和代表の大野友莉さんに、活動への思い等をお聞きしました。**

丸藤：　最近、カンボジアに行かれたんですよね。

大野：　１１月末から１２月にかけて、一週間ほどです。アンコールワットや大虐殺のあったキリングフィールド等も見に行きましたが、一番の目的は起業家の篠田ちひろさんという方に会って活動の様子を体験することと、現地の人との交流でした。

丸藤：　篠田さんは、テレビや本でも紹介されていますね。

大野：　ＮＨＫの番組がきっかけで『アジアで花咲け！なでしこたち』という本にもなっています。カンボジアの伝統的医療にも使われているハーブを地雷原に栽培し、石鹸等のスパ商品を開発をすることで貧しい農家の支援や雇用の創出をしています。２４歳の時に「地雷原をハーブで代える」をテーマに現地で起業し、今は２８歳の美しい方です。６月に小春日和に招いたのが縁で、今回につながりました。

丸藤：　交流では、どんなことを？

大野：　篠田さんの会社のプログラムで、接客サービス研修があるんです。日本のサービスは評価が高いので、それをカンボジアの人に学んでもらうんです。私は日本人観光客役になって、サービスを受ける。その様子を見て篠田さんが指導していくというものです。具体的には、マッサージ等を受けてきました（笑）。

丸藤：　カンボジアの印象は？

大野：　４０年程前のポル・ポトの大虐殺のせいで５０から６０代より上の人がほとんどいないこともありますが、若い人が多い。それと、貧富の差が激しいですね。携帯電話で話している人の横に、物乞いの人がいたり。日本製品がたくさん入っていて、最近は車が激増しているらしいです。トヨタのレクサスが人気でした（笑）。とにかく勢いがあって、１０年後を考えると、日本は大丈夫か！と危機感を持ちました。

丸藤：　やりたいことが増えましたか？

大野：　篠田さんがカンボジアに居るので、情報交換をしながら向うにゲストハウスを一軒共同で建てたいなと思っています。篠田さんの会社のカンボジア人スタッフが住込み、日本からの観光客も泊まる。

カンボジアの人は日本の言葉や価値観を学べますし、日本人は現地の人と交流しながら街歩きができます。拠点があることで、お互いに良い関係が築けると思うんです。

日本は色々な面でかなり守られていますが、向こうは生きるために必死でした。生きていくために何かをしなければならないという中で新しいモノやアイデアが生まれる、というメッセージを発し続けたいと思うようになりました。

丸藤：　人と人とがつながる場と言えば、小春日和がまさにそうですね。

大野：　５年目に入ったところです。始めた頃は、ここまで来れるとは思わなかった（笑）。今では、多少、存在は知ってもらえたかなと思ってます。

丸藤：　小春日和で行っていることは？

大野：　小春日和というものを丸で描いたとき、その中に色んなものが入って来ます。レンタルスペースやコワーキングスペースにシェアオフィス。塾やイベント、セミナーの開催とかです。不動産事業や国際交流活動も行っています。

丸藤：　凄いですね。それぞれにつながる共通のコンセプトはあるのですか？

大野：　やはり、人と人がつながる仕組みをつくるということです。あとですね、自分が発信していくものによって、社会を変えたいというデカイことも考えています（笑）。

丸藤：　どう変えたいのですか？

大野：　高齢者の人や障がいのある人も、地域の中で心豊かに暮らしていけるような街にしたいです。人がきちんと価値ある存在として大事にされ、生活を守られる社会です。そのために、小春日和のような居場所がそこここに当たり前にあるようにしたいです。

丸藤：　変えられますか？

大野：　心が有るか無いかで大きく違うと思いますが、変化はおこせます。例えば、セミナーをやると、これまでその分野に興味や受け皿の無かった人達が来ます。来やすいからとか、人とつながりたくてとか言って。それも変化のひとつだと思います。

丸藤：　まちづくりに対しての思いは？

大野：　森ビル創業者の森稔さんの言葉に、都市の再開発に際して「安心・安全、文化と芸術、緑と自然がある街」というのがあります。地域の伝統も必ず残し、心豊かになれる環境づくりをしていくということで、私もそれは求め続けたいですね。そのためにも、色んな経験をし、視野を広げ、人と出会って様々な価値観を聞く中で必要なことを見つけ出していきたいです。

丸藤：　時間が足りないんじゃないですか？

大野：　分身の術を使えるようになりたいですね（笑）。

丸藤：　経営者としての自分を、どう分析していますか？

大野：　女性経営者であることで受けている恩恵は多いと思います。それは、ひとつの特技みたいなものと考えています。しかし、入口にはその特技を使って入れるけど、そこから先は勝負の世界なので、その人の持っている本来の姿でしか評価されないですよね。女性の価値観を求められたり認められたりする時代にはなってきていると思います。ホスピタリティや女性の持っている五感、感動が新しい消費も生んでいくでしょう。でも、まだまだ、子育てや家庭のこと等では環境が足りていないです。自分がいいものをつくり成功することで、女性視点や環境づくりの必要性を周りが考えてくれるようになれば嬉しいです。

丸藤：　やはり、つなげていくことが大きなテーマなんですね。

大野：　はい（笑）。良い伝え手にもなりたいし、会社も大きくしていきたい。雇用も生み出したい。やりたいことが、まだまだいっぱいあるんです。なので、新しい年も、バリバリやっていきます！（笑）

〈聞き手〉 函館市地域交流まちづくりセンター
センター長　**丸藤 競**